

6

庄川と私たちの生活

庄川は、私たちが生活している砺波平野をつくり、たくさんの恵みを与えてくれています。ここでは、庄川と私たちの生活がどのように結びついているのか、考えてみることにしましょう。

特色と土地利用

庄川の水源は、岐阜県高山市（旧しょうかわ荘川村）の山中峠（1375 m）の山麓、分水嶺は蛭ヶ野高原、流域面積は 1,189km²、全長は 114km です。

庄川は標高 100m の庄川町金屋で、砺波平野に出ます。洪水ごとに河道を変えて土砂を堆積し、扇形に広がる扇状地を形成しました。かつては西に流れて小矢部川に合流していましたが、洪水で流れを東に移動し、現在のようになりました。

その川跡には微高地があり、そこを中心に人々が住み始めました。その範囲は金屋を頂点として、福野（南砺市）付近から中田（高岡市）付近にまで広がっています。

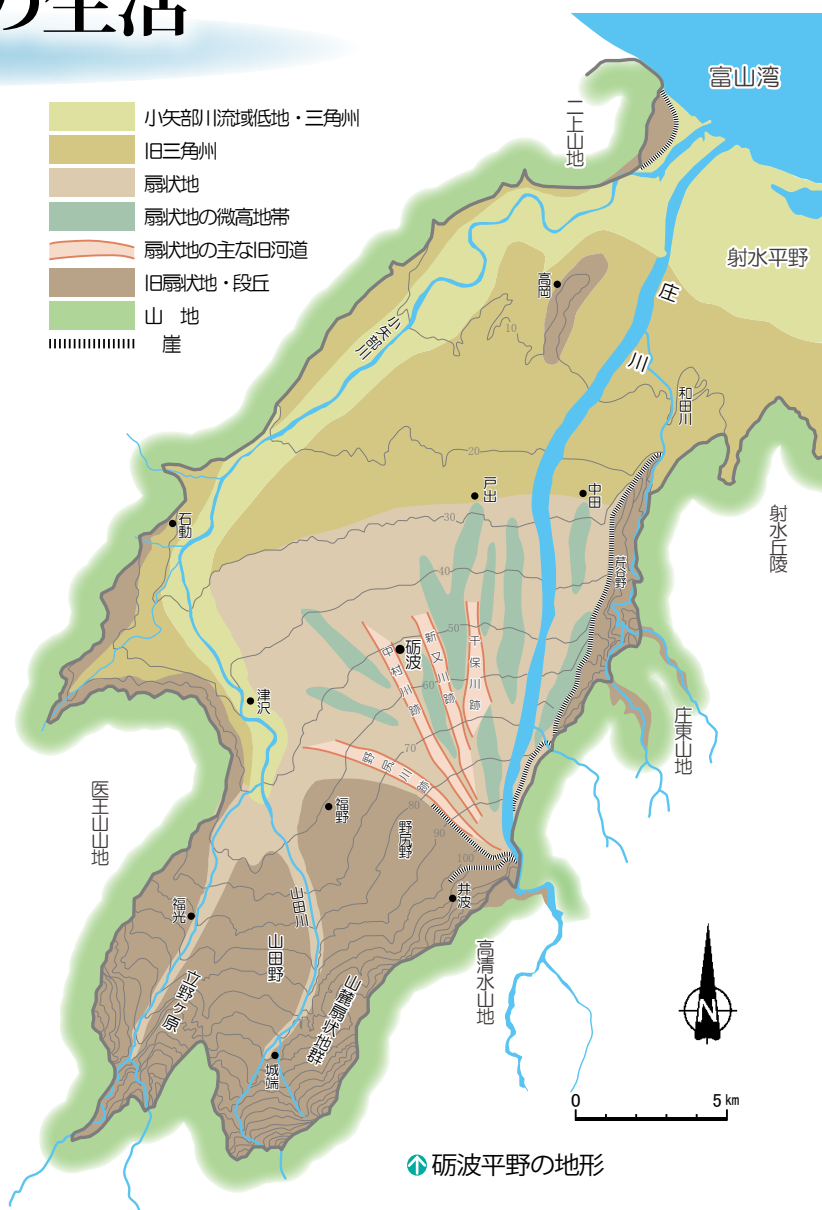
洪水との闘い

暮らしに恩恵を与える庄川も、過去には大規模な氾濫を繰り返し、人々はこれと闘ってきた歴史があります。庄川の流れが現在ののように砺波平野の東に押しやられ、安定したのは江戸時代の中ごろにまつかわよけ(まつがいき)ていぼう松川除堤防の工事が完成してからです。

けれども、流水を調節するダムが全くなかったため、洪水になると田畑や家屋が流失することが多く、昭和 9 年 7 月の大増水では下流の堤防が決壊し、太田橋が通行人もろとも濁流に流されるという惨事が起こりました。その後、上流に次々とダムが建設され、昭和 36 年、最上流に御母衣ダムが完成してから、水害の危険はようやく少なくなりました。

ところが、昭和 51 年の台風 17 号の時、上流のダムの貯水能力を超えたため、下流の堤防が決壊しそうになり、騒然となりました。

- 小矢部川流域低地・三角州
- 旧三角州
- 扇状地
- 扇状地の微高地帯
- 扇状地の主な旧河道
- 旧扇状地・段丘
- 山地
- 崖



↑ 砺波平野の地形



↑ 上空から見た松川除堤防



LET'S WORK 5

江戸時代に築かれた「松川除堤防」について調べてみましょう。



庄川流木争議

明治時代になって、富山県が最も力を入れて取り組んだのは、人々の暮らしの安全を守る治水事業でした。昭和5年（1930）に、治水と電源開発を兼ねた多目的ダムとして、当時東洋一の規模を誇る**小牧ダム**が完成しました。

しかし、このダム建設をめぐる大きな事件が起きました。ダムが建設されると川がせきとめられ、木材の流送ができなくなることから、飛州木材会社などが行政訴訟を起こしたのです。

この反対運動は全国の注目を集める中、昭和8年（1933）には木材の搬出をめぐる、約600人も関係者が大乱闘し、流血する惨事にまで発展していきました。結果的にはダム建設が優先され、県の工業化にはずみがつくことになりました。



庄川流木争議の様子

砺波平野の水利系統図

電源河川と農業用水

豊富な雪解け水を水力発電に利用することに早くから着目したのは、浅野総一郎でした。庄川水系の発電所は、岐阜県平瀬のものが最初（1926、大正15）です。その後、ダムが次々と建設され、現在では庄川水系でダムが11、発電所が23あります。発電能力は約100万キロワットで、県下有数の電源河川となっています。

また、農業用水や工業用水、上水道など、ダムのもたらす恩恵は大きいものがあります。特に、扇状地の砺波平野は、水持ちが悪く、しっかりと農業用水を引かない限り、水田耕作は容易ではありませんでした。昭和14年に合口ダム（舟戸ダム）が完成し、砺波平野12,300ヘクタールの水田（受益農家2万戸）を網の目のように潤す農業用水が完成したのです。



LET'S WORK 6



自分の家の近くを流れる農業用水は、どこから流れているのでしょうか。上の資料「水利系統図」を参考にし、調べてみましょう。

